

「21世紀COEプログラム」(平成14年度採択) 中間評価結果表

機 関 名	東京大学	拠点番号	D04
申請分野	人文科学		
拠点のプログラム名称 (英訳名)	生命の文化・価値をめぐる「死生学」の構築(A Construction of Death and Life Studies concerning Culture and Value of Life)		
研究分野及びキーワード	＜研究分野:人文学＞(死生観)(生命倫理)(臨床的知)(死者の記憶)(生命観)		
専攻等名	人文社会系研究科基礎文化研究専攻 文化資源学研究専攻 アジア文化研究専攻 日本文化研究専攻		
事業推進担当者	(拠点リーダー) 島 蘭 進 教授 他 21名		

◇拠点形成の目的、必要性・重要性等：大学からの報告書(平成16年1月現在)を抜粋

＜本拠点がカバーする学問分野について＞

人文科学の諸分野、とりわけ「生と死」に関わる文化や思想を研究する諸分野(哲学・倫理学・宗教学・美術史・日本文学等)を、「生と死」に焦点をあわせて深化させつつ、「生と死」をめぐる実践や現場(医療・ケア・福祉・儀礼等)に関わる研究を行う諸分野との接点に生じる問いを研究、考察していくものである。

＜本拠点の特色及びその目的等＞

伝統文化との間に距離ができ、新たに「生と死」との関わり方を模索している現代人のニーズに答えつつ、これまでに人文学がたくわえてきた知をさらに深め、新たな学問分野の構築を行う。伝統文化を形骸的に保守するのではなく、より積極的にいかす道を探り、医療やケアの現場、福祉や人生儀礼の現場に携わる専門家や当事者の実践と深く関わらせるような形で、世界的にも先端的な新たな人文学の研究教育拠点を形成する。

＜COEを目指すユニーク性＞

このような試みは欧米でも始まっているが、西洋の近代文化とは異なる文化と学問伝統を育ててきた日本の分厚い人文学の蓄積を踏まえた研究拠点は、他と比較しても高度の水準をもつとともに、多くの独自性をもつものとなるはずである。英語圏で始められているthanatology(臨床死生学)は死の臨床の現場に密着したものであり、文化研究・宗教研究や哲学研究・理論研究としての深度に欠ける。本研究は伝統文化の研究を踏まえ、諸学問分野の緊密な協力を図っている点で際立っている。

＜本拠点のCOEとしての重要性・発展性＞

「生と死」の現場、とりわけ医療の実践に関わる倫理問題は、国際的な合意を必要としながら、共通の認識をもちにくい領域であるが、日本における死生学の研究拠点は西洋中心の実践知が拡充していく状況に対して、適切な軌道修正の方向を示し、文化的差異に基づく軋轢を緩和し、現在、求められているグローバルな知や倫理の共有の方向性を示すとともに、それを国内外に発信していくのに貢献するであろう。

＜本プログラムの事業終了後に期待される研究・教育の成果＞

- (1) 人文学を基底とした死生学という学問分野が形成され、その分野を通覧する『講座 死生学』が刊行される。
- (2) 死生学の分野に通じた若手の専門家が育成され、医療やケアの現場との交流を深めていく。
- (3) 死生学の恒久的な研究組織が形成され、持続的な研究交流と教育が行われるようになる。

＜背景となる当該研究分野の国内外の現状と動向、期待される研究成果と学術的・社会的意義、波及効果等＞

主として死の臨床に関わるものとしてのthanatologyは欧米各国で取り込まれ始めているが、キリスト教や西洋脱近代思想に基づくものが多く、広く人文学総体の関わりはなされていない。生命倫理の研究は活発になってはいるが、個別専門領域化する傾向にあり、人文学の総力を投入した学的展開はまだなされていない。死生観、葬送や追悼、あるいは死者の記憶や鎮魂に関する研究は膨大な量のものがあるが、現代の「生と死」の実践を視野に入れた総合的な研究は形成途上にある。

機 関 名	東京大学	拠点番号	D O 4
拠点のプログラム名称	生命の文化・価値をめぐる「死生学」の構築		

◇ 21世紀COEプログラム委員会における評価

(総括評価)

当初計画は順調に実施に移され、現行の努力を継続することによって目的達成が可能と評価される。

(コメント)

「生と死」に関わる諸問題は、従来、諸科学がそれぞれ個別的に検討してきたが、本計画は人文学総体として、さらには臨床分野も含めて「生と死」を研究しようとする意欲的で新しいものである。その実施計画は、創刊した機関誌『死生学研究』（2号まで既刊）を中心として、若手研究者を育成しつつ、諸成果を挙げているのみならず、全体として諸研究が死生学の体系化を目指そうとする方向で共通認識がなされ、一致しており、順調に進展している。もっとも、欧米からの視点が中心となっているので、アジア文化（儒教・道教など）からの視点も加えての死生学の深化を求めたい。また、若手研究者育成は東大出身者以外にも人材を求め、臨床性ある実務家養成の方法を具体化して欲しい。